

子ども会 (学習会) だより

MY SKY No. 34

1998年2月24日火曜日発行 (毎週火曜日子まぐれ発行)

発行者
板野中学校
学習会
編集・文責: 吉成正士

いや～感動ですねえ、長野オリンピック。見ました? やっぱり本物を見なくちゃね!

ところで、みなさんにとって一番心に残ったのはどの場面でしょうか? 私はやっぱりラージヒルジャンプ団体ですね。何ととっても、原田のジャンプ! 船木のジャンプ! なんか見てる方まで、バアアッと視界が開け、輝く光を感じたようでした。勇気や希望をもらったようでした。原田選手は4年前のリレハンメル大会の挫折以来、長く、辛く、苦しい日々を過ごしてきたようです。この長い年月が、今回の大ジャンプを生み出したのだと思います。苦勞や挫折があつてこそ、真の人間の強さが身につくのかもしれませんね。これは、私たち同和教育に携わる者にも、学ぶべき点があると思います。

感動をありがとう! 長野オリンピック!



☆ 行ってきたよ! 渋染一揆資料館、長島愛生園(ハンセン病)現地研修(2月21日)

岡山県に研修に行ってきました。ついこの間全体学習を見に来られていた、岡山県の藤田先生という方から「ぜひお越しください!」というお誘いをいただいたので、行くことになったのです。

まず、渋染一揆資料館へと向かいました。渋染一揆はもうみなさんご存知ですよ。部落民に対して、一見してそうだとわかるように渋染め・藍染めの服を着るよう、岡山藩が強制したことに對して、部落民たちが一致団結して訴えた(一揆)事件です。

行って感じたことは、「こりゃ、行ってみなわからん!」ということです。行って、実際に自分の目で見て、初めて実感としてわかったことがたくさんありました。文章や地図として学習してはいるものの、例えば「どれくらいの距離か?」とか「どれくらいの道幅か?」とか「どうしてこの場所を選んだのか?」とか……。それが、行って初めて「あつ! そうか! な～るほど」とわかるわけです。渋染一揆を学習した人には、みんなに行ってもらいたい場所です。特に3月12日には学習会の閉講式で行くこととなりますので、学習会のみなさんはできるだけ都合をつけて(部活の先生方、ご配慮お願いす), 誘い合い参加してみてください。先生方もできるだけ参加してくださいね!

そして次に訪れたのが、長島愛生園です。ハンセン病患者が療養している施設です。と
 ころでみなさんは、ハンセン病という病気を聞いたことがあるでしょうか？

完全に治る・普通の病気である・江戸時代までは一緒に暮らしてきた

これは今回の研修会に参加したとき、「全然知らない生徒・保護者に、絶対に知っておい
 てほしいことは？」と患者さんに質問した回答です。

ハンセン病とは、らい菌が体内に入ることによって発病する感染症で、1873年ノルウ
 エーの医師アルマウエル・ハンセンによって発見された。末しょう神経が侵され、手
 足、顔などがまひして不自由になるケースが多い。1943年にアメリカで特効薬が開発さ
 れて現在は完治するが、長い間「不治の病」と思われ患者が差別や偏見を受けてきた。

明治時代、日本には3万人を越えるハンセン病患者がいたそうです。日本という国はそ
 れを恥とし、愛生園のように患者を隔離し、社会的に葬ることで解決しようとしてしま
 した。そのもとになったのが、「らい予防法」(1931年)です。この法律にはたくさんの規制があ
 り、それに反抗した者は、制裁を加えられ、監禁も行われていたそうです。「もっとおに
 ぎりが欲しい」と呟いただけで監房に閉じこめられたこともあったといいます。無実の
 罪(冤罪)をきせられたことすら……。病気になれば、心も病み、ただでさえ憂鬱な毎日が
 続くはずです。時にはイヤになって、周りに当たり散らしたくなることもあるでしょう。

その心の痛手を癒すはずの病院で、患者さんたちは逆に虐待を受けていたのです。

この法律は、つい最近の1996年になって、ようやく廃止されました。戦後すぐに特
 効薬が輸入されたにもかかわらず、それから50年以上経過しているにもかかわらず、や
 っとのことでこの差別法は廃止されたのです。しかし、今入園している方々の青春や人生
 はどうなるのでしょうか。やり場のない怒りがこみ上げてきます。故郷へ、また残してき
 た家族へと募る想い。「死んでも家には帰ってくるな」「死んでも家族に迷惑はかけられな
 い」という思いの中建てられた、納骨堂……。部落問題についても、そのことが明らかにな
 れば、「つき合い差別」を受けるとい現実がまだまだあります。たとえ結婚差別は乗り
 越えられたとしてもです……。私たちには、人権を踏みにじってきた歴史・現実から多く
 のことを学び、これからの時代を創造する義務があるのではないのでしょうか。

オリンピックの閉会式で「ふるさと」が歌われていました。なにか胸にジーンと、ずっ
 しり重く感じるものがありました……。



先日「『UFOキャッチャー』のぬいぐるみの代わり
 に『生きた亀』が登場した」という記事が新聞紙上にありました。知ってました？みなさ

「子どもへ贈る私の手紙」

題「人間としての生き方について」

一見優しそうですばらしそうな人に出会っても、どこか疑ってみたくなるような自分の心に、ふと寂しさを感じてしまうことがある。

最近テレビや新聞で報道されていること、身近での出来事を見て、40年あまり生きてきても、まだまだどん底に突き落とされてしまうことすらあることに気づかされる。

世の中は、刻一刻変化してきている。柔軟な心と頭脳を持ち合わせていかなければと思う。

しかし、いくら時代が変化してきても、人間が生きていく上で必ず守らなければならない筋道はあるように思う。それを懸命に厳守していこうとするから、各家庭においては家風、また地域においては地域性として伝えられていくものがあると思う。一人一人がそれぞれ違った方向へ向き、そこに正しいものがあったとしても見向きもしないようでは、決して前進はしていかないと思う。一人だけがいくら正しいことを声高に叫んでも、一人浮き立ってしまう。

一人でも多くの仲間と、共に手を取り合って、 $1 + 1 = \text{無限大}$ を信じて生きていきたい。

同和教育運動にかかりをもったのは、一九五六年。それから実に多くのことを学ばせられた。最もうれいことは父を語る力を与えられたことだ。

父は、一九三七年八月、鹿児島県鹿屋市の市街地から程遠いところにある国立療養所敬愛園に収容された。「らい」だった。まだ四十二才。以来、一歩も十万坪の敷地の外の自由な空気を吸うことを許されず、六十七才で他界した。脳内出血、看とる者なし。遺伝もなく、伝染力もない。戦後は治療が立証された「一つの病い」であるにもかかわらず、この病いを宣告された人々は明治以来一九九六年三月まで九十年にわたって法と正義、国家権力によって社会から隔絶されてきた。

一九九七年八月、わたしは二十六年間に父から寄せられた手紙を主軸として、この国の「らい」政策を弾じる一文を出版した。「父からの手紙」(倉風館)

戦争の混乱を経てなお手元に残された父の手紙。約三千通にこめられた父の想いは、三つに別けられる。

一つは、残してきた妻と一人息子のわたしへの絶ちがたい恩愛の情。親たちは三人の健康優良児を負し故に夭折させていた。残されたわたしは未熟児。幼い頃は、あらゆると言え程の病氣もちであった。そのいのちが生き残っているのだ。「いままぐく面会に来てくれ、鹿児島からタクシーを飛ばしても」という手紙の翌日には、「来るな。来れば別れなければならない。」

それがつらい」と速達だった。

二つめは、隔絶の地に捕われ人にされた人間としてのうめきであった。「犯罪人であれば刑の減刑や忠赦もあろう。だが、わたしは十万坪のこの敷地から一歩も出ることができない」と書いている。天地を呪いたくなる現実を父は「これが、国や社会にお世話になつてゐるわたしのせめてもの償い」と思い返す。にもかかわらずなお絶ちがたい懊悩の思いの中にあつて、若い頃から親しんできた「悪くなる親鸞」「善人なおもて往生す いわんや悪人をや」の世界が父のすべとなる。「念仏こそ」が父のいのちを支えた。やがて現実の苦悩はすべて前世の因縁であり、宿業のなせる故と合点していった。いまのわたしは違つところにいる。

私の「破戒」

林 力



不治 遺伝、伝染という社会の認識の中にあつて、わたしはいつの間にか父を「亡き者」としていた。にもかかわらず他人から「亡き父」のことを問われることを恐々としていた。「殺しても」父は大隅半島のかなたに捕われ人として生きているのだ。島崎藤村の小説「破戒」の主人公瀬川丑松と父である。「狼のやうに男らしく死ぬ」と丑松に迫つた猪子連太郎がいた。わたしは同和教育運動に触れずにはいられ、ハンセン病(らい)予防法が廃止された今日でも、わたしはなお父を語ることをなくして、人生を終つたことは間違いない。重い鉛を飲みこんだようにして。

わたしは父の真実を初めて文字として世に問うたのは一九七四年。明治図書から出した「解放を問われつづけて」であつた。父の没後、すでに十二年を経ていた。その頃、同和教育運動は一つの節目を迎えていた。大阪で解放教育読本「にんげん」が府下の全小中学校に無料配布されたことだ。まさに運動の中から生れたものであつた。この編集にあつた「解放の自覚」が位置づけられ、一九七五年には、解放教育の原則として「自」の社会的立場の自覚「こそ正しい」「解放への意欲」「差別への抵抗感」を培うものであり、そのこと

を抜きにして本当の学力はありえないとされていく。わたしの「らい」者の息子宣言も、今にして思えば、そのような運動の高揚と同和教育内容の充実を背景としたものであつた。ちなみに、その頃、わたしは福岡県同和教育研究協議会の会長であり、全国同教の副委員長でもあつた。

この思想の根柢にあるものは、もちろん、水平社宣言だ。何百回読んで胸を打つ。冒頭のことばからして、権力の造つたことをあえて高らかに使つてゐる。「全国に散在するわが特殊部落民よ団結せよ」と。わが国最初の人権宣言ともいふべきこの一文の中で、とくにわたしを揺り動かしたゆえに語りつづけたのは、「エタであること誇りうるべききた」の一節である。これはすべての被差別の状況におかれた人間に限りない勇気を与えることばだ。わたしの「破戒」の原動力もまさにこの一点であつたのだ。

九十年にわたつたハンセン病(らい)予防法という「人権侵害法」は漸く終えんした。だがあれだけ自由を求めた人々にすでに自由はない。高齢、障害をもつ身、ふるさとを捨て、ふるさとに縁を切られた人々だ。あらためてこの国の人権感覚、国家権力の恐ろしさを感じる。それにしても父の子を名乗りえわたしは幸福であつた。いま、父もわたしの「破戒」に拍手していると思う。

(はやし) ちから 九州産業大学